

# 収穫感謝日

— 「思い出すこと」と「感謝すること」 —

打 樋 啓 史

アメリカでは、11月の第4木曜日が感謝祭(Thanksgiving Day)という祝日として定められ、この時季には街中が感謝祭ムードに包まれます。その起源は、17世紀初頭にイギリスから新大陸に移住した人々(Pilgrim Fathers)が新しい土地で耕作に苦勞するなか、先住民の協力を得て初の収穫を与えられ、神に感謝するために開いた祝宴にあるとされます。しかし実際のところ、その史実性については議論があり、特に先住民の視点から考えると、移民たちによって土地を奪われ、さらに迫害や虐殺につながったということで、感謝祭を祝う風潮に批判的な意見も存在します。一般的に今日のアメリカでは、感謝祭の歴史的・宗教的意味は弱まり、親族が集まって七面鳥などの御馳走を食べる日という家族行事としての面が強くなっているようです。

さて、日本ではプロテスタントの教会の行事暦として、感謝祭に近い11月第4日曜日が「収穫感謝日」とされ、キリスト教学校などでもそれに合わせて秋の実りを祝う行事が行われます。自然の豊かな恵みに目を注ぎ、私たちが自分の力で生きるのではなく、人間を超える大きな力に養われていることに改めて気づき、感謝する。それがこの季節のテーマです。しかし、ただ年中行事としてこの時にだけ感謝するのではなく、この季節を過ごすことで私たちが生きる根本姿勢としての「感謝の心」を取り戻すことが大切なのでしょう。

これに関連して、次のような英語の格言があります。“Thanksgiving is possible only for those who take time to remember; no one can give thanks who has a short memory.” 「思い出す時をもつ人だけが感謝でき、忘れっぽい人は感謝できない」とは、忘れっぽい私には耳が痛いですが、感謝は記憶や想起と深く関わるということです。この数日や数週間、あるいは数ヶ月や数年の、バタバタと過ごしてきた日々をゆっくり振り返り、思い出すとき、感謝の念が湧き出てくることがあります。痛く辛い過去がある一方で、「本当にありがたいことだった」としみじみ感じたり、胸が熱くなったりする過去に気づきます。そうして、私たちは感謝すべきことに感謝せずに過ごしてきた自分を省みるのです。「感謝」をテーマとするこの季節、そのような眼差しで過去を思い出す時間をもってみてはどうでしょう。想起から湧き出る感謝は、きっと今を生きるための力の源泉となるでしょうから。

(社会学部宗教主事)